

べん てん どう くつ
弁 天 洞 窟

(新東京百景)

稲城市東長沼2111
☎042-378-2111
発行 2004. 2. 10

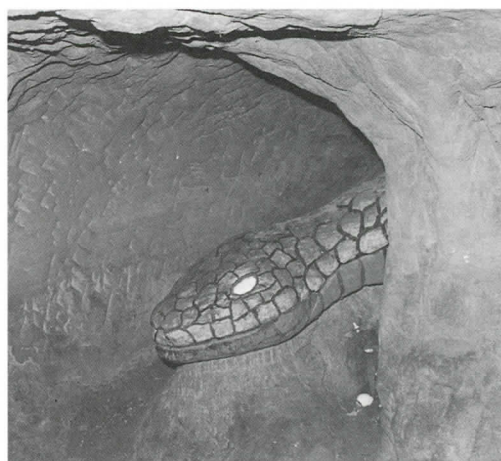


弁天洞窟内の十五童子立像（部分）

矢野口の真言宗豊山派の古刹^{いこうじ}威光寺の境内奥に弁天洞窟があります。この洞窟は現在では観光的な洞窟として有名で、昭和57年（1982）10月には、新東京百景に選定されています。受付で渡された小さなろうそくを持って洞窟に入ると、彩色された大蛇が壁際に彫られ、弁財天をはじめとする各種の石仏が洞窟内の各所に^{まつ}祀られているのを見ることができます。

威光寺に残る伝説によると、「威光寺周辺の小沢峰には、昔から大蛇が^す棲んでいるといわれていました。ある夜、村人の一人が、大蛇が現れ弁財天と化すのを夢で見ました。そこで村長ら村人28人が集まって相談し、この洞窟を掘ったところ、中から弁財天を見つけました。化身となった大蛇が弁財天を導き出したのです。この弁財天に大黒天と毘沙門天を加え、三福神として祀ったのが弁天洞窟の始まりといわれます。」このような洞窟にまつわる伝説が残っていますが、この洞窟の歴史を資料から見ていきましょう。

洞窟は、威光寺の境内奥の多摩丘陵の崖面に掘られており、もともとは古墳時代の横穴墓^{おうけつぼ}であったといわれています。（考古学者 鳥居龍蔵氏談）。一般的に見ると、横穴墓は丘陵や崖面に横穴を掘って墓室



洞窟内に彫られた大蛇（大龍）

とした古代の墓です。群集して造られることが多く、多摩川・鶴見川周辺の丘陵地では、6～7世紀頃に多くの横穴墓が造られています。稲城市域でも7世紀後半頃の横穴墓が発掘調査されていますが、弁天洞窟ももともとは、この時期の横穴墓であった可能性が考えられます。しかし明治時代に図のような曲がりくねった形に掘り広げられ、形状がまったく変えられてしまい、昔の横穴墓の面影を見ることはできません。

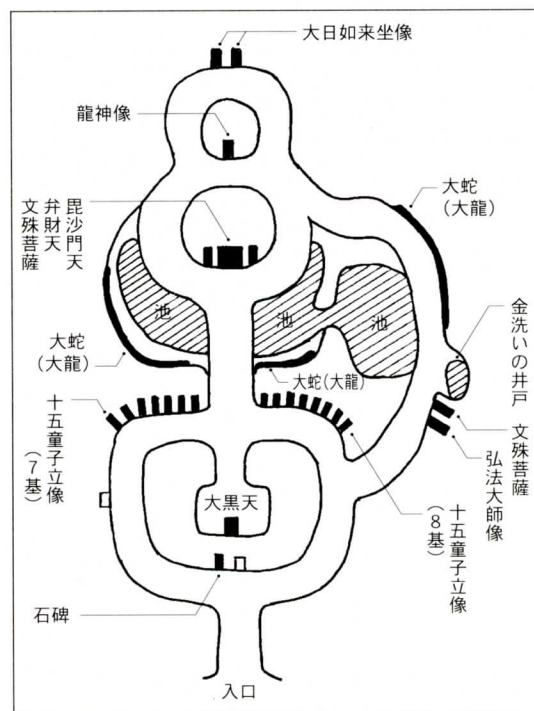
洞窟内にある2基の石碑には、明治17年（1884）8月に、この洞窟を造った矢野口村と周辺地域の村人の名前が記されています。これらの石碑によると、発願人はほつがんにん 笹久保惣兵衛、がんにしゆ 小俣勇造の2名で、願主として嘉山八郎右エ門ほか28名の村人の名前が刻まれています。伝説に残された「洞窟を掘って、中から弁財天を見つけ出した村人たち」であるようです。

またこの洞窟を掘り広げた時の設計は、当時矢野口村に居住した関流和算（日本で発達した数学）の指導者小俣勇造であったといわれています。洞窟内には、下表のような計23基の石仏・石碑が、図のように配置されて安置されています。これらの石仏は、もともとは同じ矢野口村の穴澤天神社北側の洞窟に祀られていたもので、江戸時代から明治時代の頃は、威光寺が穴澤天神社の別当寺であった関係から、弁天洞窟を造るに際して移動して祀ったものと考えられます。洞窟内は図のような複雑な形をしており、中央部に配された池の周囲には、彩色された大蛇がまるで洞窟の壁際を這っているように彫刻されています。池の奥は8の字状に掘られ、弁財天、大日如来、龍神などが配置されています。右手の通路の奥には、金洗いの井戸があり、ここで紙幣や硬貨を洗えば、ご利益があるといわれています。昭和57年に新東京百景に選定されてからは、稲城の観光的な名所として、多くの人々に拝観されています。（※弁天洞窟は有料拝観ですので、威光寺において拝観券を購入してお入りください。）

参考文献 『石造物と信仰』（稲城市教育委員会）

石造物	年代	高・幅	形状	数量
童子立像	宝暦8年(1758)	60・32	舟形	15基
大日如来像	宝暦8年(1758)	60	舟形	1基
大日如来像	——	60・32	舟形	1基
大黒天立像	——	50	台石付	1基
弘法大師立像	——	65	台石付	1基
龍神像	宝暦8年(1758)	62	台石付	1基
弁財天	文政10年(1827)	56・22	祠堂	1基
石碑	明治17年(1884)	79・21	石柱	1基
石碑	——	83・22	石柱	1基

洞窟内に安置された石造物



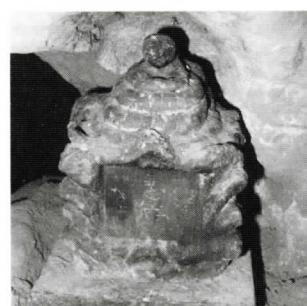
弁天洞窟案内図



岩屋願主の石碑



弁財天の祠堂



龍神像



弁天洞窟の入口部